

## CoCoLo の教育でつながる

### 地域・生徒・学校



玉野市立玉野商工高等学校

指導教諭 佐藤 伸治



### 1. はじめに

本校は岡山県南部の瀬戸内海沿岸にある造船のまち玉野市に位置し、昭和 32 年に岡山県で初めての市立商業高校として設立された。以来 12,000 名以上の卒業生を輩出し、「地域に愛され、地域に根ざし、地域に貢献する学校」として歩んできた高校である。

「玉野市立玉野商業高等学校」として 60 周年を迎えた平成 30 年度から機械科を新設し、機械科とビジネス情報科を併設した「玉野市立玉野商工高等学校」として 3 年目を迎えている。



▲本校の外観

令和元年度から、これまでの「人、もの、未来をつくる」学校を土台に、「CoCoLo（こころ）の教育（育てたい資質・能力を伸ばす教育）」を推進し、「人間力」「実践力」「基礎学力・専門知識力」という三つの力を伸ばすため、地域の方々の協力を得ながら、協働して教育を進めている。

地域の人材・資源を活用した教育活動として、これまでも地元商店街と連携した Web ページの制作や、地元菓子店と共同開発したスイーツ商品の販売、C 級グルメとして地元イベントでは欠かすことのできない「あなご焼きそば」の開発、地域イベント「UNOICHI～海が見える港のマルシェ～」

の企画運営など、「ビジネス基礎」「課題研究」「ビジネス経済応用」などの授業で、地域をテーマに様々な外部講師を招聘し、グループワークやフィールドワークを通して課題発見・課題解決型の授業を展開している。



▲地元商店街活性化プロジェクト（商店街 PR 大作戦）

### 2. 未来プロジェクト

#### （1）CoCoLo の教育 ～指導と評価の一体化～

平成 30 年度より「機械科」が新設され、「人・もの・未来をつくります」をコンセプトに「玉野商工高等学校」と校名を改め、ビジネス情報科 120 名、機械科 40 名の定員で新たなスタートを切ることとなった。「商業」に「工業」が加わることで、地域産業の担い手として、地域へ貢献できる人材をこれまで以上に育成する使命があると考え、「未来プロジェクト」を組織し「育成したい資質・能力」についてプロジェクトメンバー（主幹教諭、指導教諭、商業科主任、工業科主任、進路課長、普通科教員など 6 名）を中心として、本校生徒、保護者、学校評議委員の意見に加えて、玉野市立高校在り方検討会議、関係中学校及び企業の意見も反映し、全教職員で協議を重ね、「CoCoLo の教育」を完成させた。



▲未来プロジェクトによるランチミーティングの様子

## (2) 玉野商工グランドデザイン

CoCoLo の教育の3つの柱である「人間力」「実践力」「基礎学力・専門知識力」について、より具体的に全教員で検討を続け、育成したい資質・能力を9つに整理した。



▲全教職員によるグランドデザインの設計

グランドデザインではミッションを「地域と共に CoCoLo (こころ) を育て、地域に貢献する人材を育成する」とし、地域とのつながりを意識した授業や主体的に学習に取り組む態度を育成する授業改善や教育課程の充実を通して、以下の9つの力を育てることを目指している。

### ア 育てたい資質・能力

#### 【人間力 (Communication：思考の伝達)】

- ①自己理解力
- ②他者理解力
- ③人間関係形成力

自分の長所と短所を理解したり、相手の気持ちを考えて関わったりしながら、周囲の人に良い影響を与えると共に、自発的に仲間と協力してチームで働くことができる。

#### 【実践力 (Collaboration：協働)】

- ④地域文化理解力
- ⑤キャリア実践力
- ⑥社会参画力

地域や他国の伝統文化を理解し交流すると共に、それらの文化的、社会的な取組に主体的に参画することなどを通じて、自分の人生について見通しを持って行動できる。

#### 【基礎学力・専門知識力

(Logical thinking：論理的思考)】

- ⑦知識力
- ⑧創造力
- ⑨課題発見解決力

学習習慣を身に付けて学んだ内容を活用し、様々なアイデアや意見をもとに活動、分析、評価すると共に、地域や社会の課題の解決方法を探求し、一般化することができる。

### イ 評価について ～ループリック評価～

完成したグランドデザインをもとに、未来プロジェクトのメンバーが中心となり、本校生徒、保護者へアンケート調査を行い全教員でループリックを完成させた。教員と生徒がループリックを共有することで、3年間で身につける力を明確にイメージすることができ、授業改善や学習意欲の高揚が期待される。

CoCoLo の教育 育成したい資質・能力ループリック▶  
(本校 Web ページにも掲載)



### ウ GROW UP シート

未来プロジェクトでは、CoCoLo の教育を推進するために、授業や特別活動、ボランティアなどの教育活動全てにおいて生徒にループリックを意識させ、成長を促す仕組みが必要と考え「GROW UP シート」を作成した。1 学期始めに全校生徒にループリックの意義と「GROW UP シート」の活用方法について説明した。

令和元年度は、年間を通して「人間関係形成力」の育成を重点目標とし、一部の授業や学校行事の中で「GROW UP シート」を生徒に配布し、あらかじめ自分の目標を立て、学習後の振り返りを通して9つの力がどの程度身についたか振り返りをさせた。



▲全校生徒にルーブリックとGROW UPシートを説明

「GROW UP シート」に対する生徒アンケート調査の結果からは、ルーブリックを示したことで、「何ができれば良いのか明確でわかりやすく良いと思った」、「他の人に説明できて始めて本当に理解できたと言えるということがわかった」、「クラスメイトとの協力が必要とされていることがわかった」、「以前よりも授業に集中しているように思う」などの肯定的な意見や、ルーブリックを示したことの変化として、「一番良い評価を目指して頑張った」、「授業に臨む姿勢が変わった」という意見が多く見られた。また、ルーブリックや「GROW UP シート」を活用することで、教師が行う評価に対して、「信頼できるものになった」と感じている生徒も多く、「次の授業では前の授業でできていなかった事を頑張ろうと思えた」という意見もあった。教師にとっても、学校のグランドデザインに基づいた「育成したい資質・能力」について、生徒自身が「GROW UP シート」に主体的に目標設定し振り返る活動を定着させることができる」と肯定的な意見が多く寄せられている。

GROW UP シートへの記入の仕方 ▶



### 3. 成果

ルーブリック評価について育成したい9つの力のうち、5項目（他者理解力、人間関係形成力、地域文化理解力、社会参画力、課題発見解決力）について各学年において0.3ポイント上昇を目標に取り組んだ結果、ほぼすべての項目で目標値を上回る結果となっている。また、「GROW UP シート」について、生徒自身が立てた目標に対して、行事前後の評価を比較したところ、次のような結

果となった。平均すると74.3%の生徒が「目標を達成した」、12.2%の生徒が「目標を上回った」と答えており、合わせると8割以上の生徒が目標を達成したと答えている。

| 行事・活動名        | 目標を達成した | 目標を上回った |
|---------------|---------|---------|
| たまの港フェスティバル   | 74.0 %  | 9.3 %   |
| オープンスクール      | 76.9 %  | 11.5 %  |
| ビーチサッカー       | 63.0 %  | 7.4 %   |
| インターンシップ      | 77.0 %  | 6.7 %   |
| 学校祭（1年）       | 75.7 %  | 15.1 %  |
| 学校祭（2年）       | 82.7 %  | 12.8 %  |
| 学校祭（3年）       | 80.3 %  | 15.8 %  |
| キッズビジネスタウンたまの | 64.9 %  | 18.8 %  |
| 平均            | 74.3 %  | 12.2 %  |

### 4. 今後の展望

グランドデザインに基づいたルーブリック評価と「GROW UP シート」の活用により、これからも生徒の成長に合わせて地域と学校、生徒を結びつけるCoCoLoの教育の改善を図る必要がある。そのためには学校をとりまく地元企業や地域住民、近隣小中学校などステークホルダーからの意見が重要であり、生徒自身や保護者の想いも反映させる必要がある。

本校では平成30年度「玉野市立高校在り方検討会議」による意見書に基づき、これまで以上に高校を魅力的にし、地方創生の視点に立った高校の使命を果たすため、機械科とビジネス情報科の教育内容が融合したカリキュラムの検討、地域企業と共に生徒を育てる協働活動、地域リソースを活用した課題解決型学習、両科におけるデュアルシステムの導入、「キッズビジネスタウンたまの」の充実による小中学校段階から共に育てる仕組みの構築、小中と連携した地域貢献活動や課題解決型学習などのカリキュラム構築について、平成30年度から「学校運営協議会」及び「研究推進協議会（令和元年度文科省研究指定）」を設置し検討を続けている。

学校運営協議会のメンバーは、これまで地域連携活動でつながりを持った方々も多く、目指す生徒像に関する学校運営のビジョンが共有されており、保護者や地域住民などの理解と協力を得た学

校運営が実現できると期待している。

協議会では3つのワーキンググループ(WG 1：企業連携, WG 2：小中高等学校間連携, WG 3：ボランティア連携)を組織し、外部の協議会委員と本校教職員、代表生徒とともに、目指す生徒像やそれを実現する手立てについて審議を重ねており、令和2年度からは全教職員の参画のもと引き続き検討を進めていく予定である。

## 5. おわりに

政府は地方創生の第2期となる2020から2024年度の方向性を示す「まち・ひと・しごと創生基本方針」を昨年6月に閣議決定し、地域の課題である人口減少や少子高齢化などの解決には中長期にわたる対策が必要で、高校など学校を舞台とした次代を担う人材育成に重点を置くことが求められている。地方創生に関する有識者会議報告書のポイントは次の通りである。

- ・次代を担う人材育成に重点的に取り組むよう提言
- ・高校生を対象に地域の産業や文化への理解を深める教育を実施
- ・東京一極集中の是正策拡充を要請
- ・東京圏で暮らしながら地方企業の経営改善などに貢献する「関係人口」を拡大
- ・地方の雇用確保といった基本目標は維持

第2期では「高校生を対象に地域の産業や文化への理解を深める教育を実施」することで、進学や就職で地方から離れても将来的にUターンが期待できると強調しており、これからの地方の高校における教育は、まさに「地域」と「生徒」と「学校」が教育活動を介してつながる必然性があることがわかる。

しかしながら、政府の教育再生実行会議が昨年5月にまとめた第11次提言では、高校生の7割が通う普通科の改革が求められている。その内容は普通科の画一的な教育内容について、生徒の意欲が高まるものとなっていないと指摘している。そのために普通科高校で重視する教育内容を次のような4タイプとして特色を持たせるように促している。

1. 進学や就職などキャリアを自身で形成する力の育成
2. グローバルに活躍するリーダー、国内外の課題を解決できるリーダーの素養の育成
3. 科学技術分野でのイノベーターとしての素養の育成
4. 地域課題の解決を通じ、体験と実践を伴った探究的な学び

4タイプの中で「地域課題の解決を通じ、体験と実践を伴った探究的な学び」に関する教育内容は、これまで商業教育で長年にわたり実践されてきた内容である。しかしながら、今後は普通科高校がこの部分の教育を商業科と同じように学ぶこととなる。普通科高校での取り組みも、今後はビジネスの視点を取り入れながら、体験と実践を伴う主体的で対話的で深い学びに基づく探究的な学習が行われることは想像に難くない。すなわちこれまでの地域連携などの取り組みがもはや商業高校だけのものではないということを物語っている。これまでの商業科で行われてきた「情報処理」や「課題研究」の内容が、社会にとっても有用で必須の教育であることの証でもあるが、これまでの教育内容を見直すことなく、旧態依然の指導を行っている、商業教育の未来は明るくないと感じている。落語家の故・立川談志は、まだ落語人気の衰えが一般大衆にも浸透せず、同業者にも危機感を持って捉えられていなかった昭和30年代に、「このままだと落語はいずれ“能”と同じ道をたどる」と警鐘を鳴らし、古典落語に現代の視点を入れて落語の衰退に歯止めをかける工夫を凝らし、その落語は数ある古典芸能の中でも人気の芸能となっている。

現在ではビジネスアイデアを競う各種コンクールも全国各地で開催されているが、そのランキングには普通科高校が上位を占め、商業高校の参加が少ない現状もある。商業教育を落語に例えることはできないが、商業教育の未来を明るいものとするためにも、普通科との違いを明確にするため、普通科高校では教育することが不可能な確かなビジネスの理論に裏打ちされた探究的な活動を行い、主体性と創造性を育み社会に出すことが必要であると考えられる。